

いま高校・大学で何を学ぶか、どう学ぶか 二人の新学長が語る立高生へのメッセージ

座談 立高は多種多彩な人材の宝庫だ

(平成 27 年 8 月 9 日実施)

平成 26 年 12 月に一橋大学の学長に就任された蓼沼宏一先生（高 30）、平成 27 年 4 月に首都大学東京の学長に就任された上野淳先生（高 19）。立高出身の二人の新学長を立川高校の校長室にお招きし、下條隆史校長を聞き手に、立川高校に対する思いや現役立高生へのメッセージなどを存分に熱く語って戴いた。

出席者：上野淳（首都大学東京学長・高 19） 蓼沼宏一（一橋大学学長・高 30）
聞き手：下條隆史（東京都立立川高等学校校長）



上野淳（うえの・じゅん）

岐阜県生まれ。1967 年東京都立立川高等学校卒業。1971 年東京都立大学・工学部・建築工学科卒業。1977 年同大学大学院工学研究科修了、工学博士。1977 年同大学工学部・助手、1984 年同大学工学部・助教授、1993 年同大学工学部・教授。2009 年首都大学東京理事・副学長・大学教育センター長。2015 年首都大学東京学長。専門、建築計画学。主な著書、岩波書店『未来の学校建築』（岩波書店）、『高齢社会に生きる』『学校建築ルネサンス』『多摩ニュータウン物語』（以上鹿島出版会）その他多数。主な建築作品、千葉市立打瀬小学校（基本設計・実施設計 計画設計指導・コンサル）、稲城市立若葉台小学校・計画指導。韓国：檀國大学校天安キャンパス計画・工学部新館基本設計鶴見大学附属中高一貫校その他多数。



蓼沼宏一（たでぬま・こういち）

東京都生まれ。1978 年東京都立立川高等学校卒業。1982 年一橋大学経済学部卒業。1984 年同大学大学院経済学研究科修士課程修了。1989 年ロチェスター大学大学院経済学研究科修了、Ph.D. in Economics 取得。1990 年一橋大学経済学部専任講師に就任。1992 年同助教授、2000 年同大学大学院経済学研究科教授、2011 年同経済学研究科長・経済学部長を経て、2014 年 12 月一橋大学長に就任。専門分野は理論経済学、厚生経済学。主な著書に、Rational Choice and Social Welfare: Theory and Applications (P. Pattanaik ほか共編著, Springer, 2008)、『幸せのための経済学——効率と衡平の考え方』（岩波書店、2011 年）がある。専門論文は、学術誌 *Econometrica*, *Review of Economic Studies*, *Journal of Economic Theory*, *Social Choice and Welfare* 等に掲載されている。



下條隆史（しもじょう・たかし）

東京都立立川高等学校校長。東京理科大学数学科卒業後、小平西高校に数学教師として着任して以来、福生高、大泉高定時制で数学を教える。教頭として田無工業、副校長として文京高と駒場高。その後、校長として東村山西高、現在立川高校校長として 5 年目。他、東京都高等学校情報教育研究会や全国高等学校情報教育研究会の会長を歴任し、現在は東京都高等学校数学教育研究会会長、日本数学教育学会副理事長を務める。

1 若い頃の夢

-----私（下條校長）は数学が専門で、現在日本数学教育学会の副理事長をしており昨日まで北海道に行っておりました。北大にもちょっと見学に行ったのですが、大学院試験の最中とかで、大学の先生方も夏休みの時期もいろいろとお忙しいようですね。本日はお忙しいなかお集まり頂き誠に有難うございます。「夢」というのは少しずつ変化していくもので、私の場合も小・中学生、高校・大学とでそれぞれ変化していきました。困みに私は宇宙飛行士になりたかったのです。この体で（笑）。蓼沼先生の場合はどんな夢をお持ちでしたか。

蓼沼 宇宙飛行士のような何か具体的な職業を夢として描いてはいなかったのですが、社会の役に立ちたい、そしてそのために自分ができることは何なのだろうとは考えていました。小・中学生の頃から社会研究や地理・歴史などの自由研究が好きで、研究することで社会の役に立ちたいと思う気持ちはその頃から既に持っていたと思います。

上野 私は小さい頃から理数系が好きで、中学～高校の頃は何となくエンジニア、技術者になりたいと思っていました。高校二年生の時に建築に出会って建築の分野に進みたいと思いました。

-----私も建築には興味があり、高校1年生の時に長い橋を作りたいという夢を持っていました。本州と四国を結ぶ橋とか、そういうのを作って見たかったですね。

2 立高は多種多彩な人材の宝庫だった

-----今振り返って、立川高校にはどんな思い・感想をお持ちですか。

上野 今でも立高時代の友人10名以上と非常に濃厚な交流があり、得難い私の財産です。大学時代の友人と違って、弁護士だったり、翻訳家だったり、商社マンとして海外で活躍したとか、非常にバラエティーに富む人材がいっぱいいます。年に何回か食事したり一緒にゴルフしたりという友人に恵まれて、非常に幸せです。やはり立川高校で濃厚な青春時代を過ごしたという原点があるからだと思いますし、そういう意味では立川高校に対して今でもとても感謝しています。立高時代の友人は多種多彩の 인재がいっぱいたなと、今振り返っても益々その思いを強くしています。

蓼沼 立高には友人同士や先生と生徒の間に非常に密度の濃い人間関係がありましたね。それは中に入ってみなければ判らないことでした。多士済々というか多彩な生徒がいて、しかもその個性を学校が決して摘み取らない。自由・自律で、そしてまた生徒同士がお互いを尊重するという雰囲気がありました。様々な異才がいて、みんな伸び伸びと好きなことをやっていました。そういう意味でもほんとに良い高校だったなと思います。いろいろな生

徒がいて、とても面白かったです。卒業してからも様々な方面で活躍している同期生も多いですね。

-----確かに立川高校には今も多士済々というか、多種多様な個性豊かな生徒が多いですね。最近少し大人しくなってしまう印象もありますが……。

3 生徒を信頼してくれた先生方

-----立川高校で学んだこととか、熱中したこととか、お話しりたいのですが。

上野 正直なところ私の高校時代はそんなに自慢できるものは無かったですね。迷ったり、時に自信を失ったり、または時にカラ元気になったり、そういう繰り返しだったと思います。ですからそれほど美しい青春時代だったとは思いませんが、総じて言うと多士済々のいろんな友人と出会うことが出来たということが、私の立川高校時代のすごく大きな財産です。

-----蓼沼先生はどうですか。熱中したこととか、心に残る思い出とかありますか。

蓼沼 面白い先生が何人もいましたね。例えば家弓先生は教頭先生で一年生のとき私達の数学の担当教官だったのですが、私達の教室が教頭室の隣なのでクラスの授業が休講になるとその時間に私達の前に現れて数学の授業を始めるのです。皆からブラックジャックならぬブランクジャックと呼ばれていました（笑）。しかもそのレベルがとても高く、クラス皆で参考書をひっくり返して調べてもどこにも出ていない。ベクトルの公理系の話とかも始める。後に大学の授業で同じ内容が出てきたので、当時解らなくて当然だったのだとその時判りました。世界史の小暮先生も面白い先生で、普通はヨーロッパの歴史や日本との関係を重視して教えるのですが、アジアやアフリカの歴史が大事だと仰る。その授業がとても面白くて、私もいろいろ自分で調べたりするのが好きでした。生徒にもいろいろ個性的な生徒がいて、文芸評論家顔負けの評論をするような者とか、数学が飛び抜けてできる者などがいて、ほんとに世の中にはいろいろな人がいるのだなということを立高で思いました。貴重な3年間でした。

上野 先生方が生徒をとて信頼してくれていたという、そういう気持ちが強く残っていますね。立川高校が有力進学校だったせいもあるのですが、勉強しろと言われた記憶はほとんど無いです。先生方が「うちの高校の生徒は自発的に勉強する」と思ってくれていたみたいで、伸び伸びと高校生活を楽しむことが出来ましたが、それでいてしっかり勉強しなくてははいけないんだ



というプレッシャーも自然に培われたように思います。

-----今は生徒に「勉強しろ、勉強しろ」と言っていますからね。教育委員会からのプレッシャーもありますし、大変ですよ。

4 現役で希望の大学・学部へ

-----それから大学に進まれるわけですが、大学に進まれる際に何かこの方向に進もうとかいうきっかけはあったのですか。先生からの影響とか、自分で主体的に勉強している中でこちらの方向に行こうかなとか。

上野 先ほども言いましたが、小さい頃からエンジニアになりたかったですし高校2年生の時には既に建築に進もうと考えていました。それで東京都立大学（当時）工学部に入りました。こぢんまりとしているけれども総合大学で、入学してここなら落ち着いてやって行けそうだと感じました。

-----建築でどういう方面を専門にやろうと思われたのでしょうか。

上野 その時は建築学にいろいろなフィールドがあるとは解っていなくて、先ず設計者とか、建物を建てるための技術者になるのだらうと思っていましたが、この分野という具体的なイメージはなかったと思います。今の専門の建築計画学に進もうと決めたのは、大学4年の時です。

蓼沼 私の場合は社会の勉強が好きでしたので、自然に社会科学の大学、学部に入ろうと思っていました。経済学や法学などの社会科学を学ぶのには、一橋大学が良いと思いました。また、父が一橋大学で労働法を教えていたのですが、自宅に一橋大学の学生がしょっちゅう来るのです。ゼミの続きの議論をして、その後は飲んだりもして、夜遅くまで学生がいる。家族とも当然接触があり、一橋大学の教員と学生がとても近い関係にあるというのは肌で感じていました。ですから自分もそこで学びたいなという気持ちが強くなりました。当時は各大学独自の入学試験を行っていて、一橋の入試、東大の入試、私立大学の入試それぞれ全く違うし、問題の傾向も違っていました。共通一次試験制度が始まる前でしたから、私は一橋大学集中型の勉強をしていました。そして法律か経済かとなった時に、父のいる法学部はさすがに嫌だし、親と関わりたくないなと思い、経済学部に決めました。ところが高校3年の12月になって父が学長に選ばれてしまい、ほんとうに困ったなと思いましたが、他に選択の余地も無かったので、一橋大学を受験しようと決めました。

-----希望通りの社会科学の大学で、修士、博士課程と進まれるわけですが、大学時代に今の研究をしてみようというきっかけとかはあったのですか。

蓼沼 大学ではもちろん経済学全般の勉強をするのですが、社会の政策とか制度改革等に役立つことを学びたいと思い、初めは財政学を専攻しました。その中で最終的には何が社会的に望ましいのかという評価と選択が重要なのだと考えるようになり、だんだん基礎理論のほうに向かっていきました。財政政策や課税の理論から基礎理論のほうに遡り、博士課程に入ってから社会的評価と社会的決定の理論、厚生経済学、社会的選択理論という分野を研究するようになり、アメリカの大学ではその専門の先生につきました。現在の専門分野も厚生経済学と社会的選択理論です。

5 大学時代に熱中したこと

-----大学時代に熱中したことは何でしょうか。

上野 当時の大学の技術者教育というのはスパルタ教育でしたね。設計製図、実験実習、物理実験、コンクリート実験、そして非常にハードな設計の課題が出されて、それら全てがクリアできないと卒業ができないという時代でした。製図室に泊まり込んで夜明けまで設計製図の課題をして、そこでみんなで起こしあって講義に出掛けていくという生活でしたが、でもそれがすごく楽しかったですね。そういう意味で自分の好きなフィールドに進むことができ一所懸命打ち込めたという、そういう充実した大学生活でした。

-----私は理学部(数学科)で、特に数学というのは紙と鉛筆があればどこでも勉強できるのですが、工学部は大変ですよ。物理や工学系はずっと夜遅くまで実験などやっていたり。そういう面では文系は……。

蓼沼 比較的自由ですし、工学部に比べれば縛りは緩かったですね。単位さえ取ってれば自由な時間がかなりありましたし、好きなことができました。大学には最低限しか来ないという学生もいましたね。私はもともと研究することが好きなので、これ幸いとばかり図書館に籠ったりして、好きな本を読んでいました。今は、授業も以前より大分厳しくなり、学生もよく出席して勉強するようになってきたと思います。

大学で熱中したことと言えば、陸上ホッケー部に入り、4年間ずっと部活を熱心に続けて試合にも出ていました。

-----本を読み漁ったというのは、特にこれを調べたいとか自分なりに課題を見つけて、というのがあったのでしょうか。

蓼沼 そういう場合が多かったと思いますが、講義などで面白い話などが聞けたときに、その関係の本を読んでみようというケースもあったように思います。

-----上野先生の大学での専門分野は建築ということで良いのですか。

上野 建築と言っても、例えば地震の揺れに対しても壊れない技術を研究する構造部門とか、照明や空調などのいわゆる環境をコントロールする分野とかいろいろあります。私の専門は建築計画学といって建築設計のための基本的な原理を追求するものです。たまたま卒業論文に師匠と同じ建築計画を選んだことがすごくラッキーでした。数理的な部門と社会学的な部門が入り混じったような分野で、自分の資質にとっても合っていました。高校の生徒諸君も自分が没頭できるような分野を早く見つけて、それに合った大学、学部に進学できるよう、自分に合ったフィールドは何かということを探ることがとても大事だと思います。

6 当時はとても少なかった大学院生

-----そしてお二人とも大学院に進まれるわけですが。

蓼沼 経済学はなかなか悩みの多い学問なのです。物理学などにも似ている面もあるのですが、物理のように実験が出来ない。だから確たる答えを得にくい。論理実証主義に立っているのですがなかなか実験、社会実験が出来ない。最近はそのような実験も行う分野も発展してきているのですが、社会全体を実験することはできない。その一方で、経済学は社会制度や公共政策の改善への貢献を求められる。私も制度改革や政策に関わっている中で、そして研究していく中で、何がもやもやしたものの原因なのかなと考えたときに、不確定な要素が残る中で評価し、社会的に決定するところが問題なのだと思います。政策や制度にかかわる分野である財政学の研究をしているうちに、専門分野の方向が少しずつ変わり、今の分野に行き着いたという感じです。

上野 当時は大学院に進む文系の学生はどのくらいいたのですか。

蓼沼 とても少なくても経済学研究科の同期生は10名で、内部からの進学者は5名のみ。ですから本当に研究者を養成するためだけの大学院でした。理系の場合にはエンジニアになるためにマスターまでいく学生がかなり多かったと思いますが、文系の場合は大学を出て大学院に行くのは変わり者だと思われていました。お前まだ続けるのかと。(笑)ほんとうにわずかで、二百数十名の経済学部の学生の中で5人しか行かない。そういう時代でした。今は修士課程に専門職養成のコースなどができたので、大学院入学者の数は格段に増えました。毎年、内部・外部進学者合わせて経済学研究科で70名前後、一橋大学全体では約600名が大学院修士課程に入学します。これからは更に増えていくと思います。

上野 今は工学部の8割くらいが大学院に進学するのですが、私の時代は40人のクラスで4～5人しか大学院に進みませんでした。経済が右上がりの状況でしたからね。それこそ大きな建設会社でも何社からでも自由に選べるという時代でしたので、そういう面でも大学院

に進学する学生は少なかった。

蓼沼 全くその通りですね。当時はまだ日本経済も引き続き成長期でしたし、一橋大の学部を出れば自分の好きな企業に行ける時代でした。大学院に行くというのは5年、いや場合によっては10年分位の給料を犠牲にするということになるわけで、本当に研究の好きな学生しか大学院には行かなかったですね。

-----私も数学の研究者になろうと思い一時期大学院に行こうと思ったのですが、東京都の教員採用試験に受かってしまったので、こっちの道に来てしまいました。

お二人は大学院に行かれ、博士課程にも進みドクターも取られているのですが、教職に就こうと思ったのはいつ頃だったのでしょうか。

上野 私は教職に就くというつもりは余りありませんでした。そういう選択肢もあるのかなという意識はありましたが、博士の学位をなるべく早く取って、あるスペシャルな土俵を持ったエンジニアになろうと思っていました。ところが、大変幸せなことに博士課程を卒業する時に師匠が「来月から君、助手になりなさい」と仰って下さいました。今は助教でも准教授でも全国公募が当たり前ですが。当時は師匠の一声で教員にならせていただくことが出来ました。一生懸命助手として師匠を補佐しながら自分の研究もやっておりましたら、ある日突然師匠から「この5年間の業績を纏めて明日持って来なさい」と言われて持って行きました。「分かった。10月から助教授にします」と。(笑)今から思うととんでもないことなのですが、私の時代はそういう時代でした。極めて幸せな人生だったと思います。



-----今は何をやるにも透明性が重視されているので、教員公募などをして教員選考をしないと怒られる時代ですが……。蓼沼先生の場合はどうだったですか。

蓼沼 当時、文系の場合は大学院に行くとした時点で、大学の教員になるしか選択肢がなくなりました。他に道は無いし、企業も採用してくれませんか。欧米の国ですと、文系でも修士や博士の学位を持って企業に勤めたり、官公庁等に行くというケースは既にかなりあったのですが、当時の日本ではまだほとんど無かったのです。ですから大学院に行くとした時点で教員になる覚悟を決めました。大学院に進んで更に勉強をして論文を書き、大学の職を探さなければいけない。何年後に職に就けるか判らない、そういう不確定の世界に入っていったということですね。今は日本の社会状況も大きく変わり、修士課程を修了してから一般の企業などに就職する人の数も大幅に増えました。

----- 蓼沼先生は大学卒業後一旦アメリカに留学されたのですが、戻られるつもりで行かれたのですか？

蓼沼 いや、どうなるか全く判らなかつたですね。博士号を取れるかどうかも判らないですし、その先どうなるかも全く判らない。場合によっては米国で良いポストがあればそのまま米国に残るということもあり得ました。ただ、米国のジョブマーケットに出る段階になった時に、私のゼミの先生から戻って来なさいと呼ばれましたので、一橋大学に戻ることにしました。

----- 研究論文か何か発表されて、それがきっかけで呼ばれたのでしょうか。

蓼沼 その時点で既に何回か学会でも論文発表はしておりましたので、先生ももちろんご存知だったと思います。

7 現在の専門分野

----- 次に今の専門分野について説明してほしいのですが、先ず蓼沼先生、厚生経済学というのはどういう専門分野なのでしょうか。

蓼沼 様々な政策や制度の改革を考える時に、最終的に考えなければいけないのは資源配分や社会システムの社会的望ましさをどういう基準で評価するのかということで、それを研究するのが厚生経済学。もう一つは、社会の中にいろいろな意見の違いがあって個人の評価の仕方もさまざま異なるときに、どういう方法でそれを社会的に集約して一つの社会的意見に纏めていくか、ということの研究するのが社会的選択理論。両者は非常に密接に関連しています。その二つが今の私の研究分野です。社会的望ましさの最終的な基準は、人々の幸せがどうやって高められるかということであり、それを阻害する要因があれば、それは効率性に反し資源を無駄に使っているのだから是正しなければいけない。また、資源が制約される中でそれぞれの人々が幸せを高める場合にはどうしてもトレードオフがある。そのときには、誰をそして何を優先すべきか、そのバランスをどのように取らねばならないかという衡平性も重要です。そういった効率と衡平の基準を明確にして、基準に基づいて評価していくということが厚生経済学の課題です。

----- 上野先生の建築計画学のお話も、もう少し補足お願いします。

上野 建築計画学にもいろいろな系譜があるのですが、私は学校とか病院とか高齢者施設とか、いわゆる地域公共施設の計画原論をずっと長くやって来ました。人間行動科学とか環境心理学とかも併せていろいろ勉強しながらやって来ました。

8 学長に就任して思うこと

-----学長に就任されてからの感想をお聞きしたいのですが。教授として教えていた時とはいろいろ変わったことと思うのですが。

蓼沼 今は大学の置かれている環境が厳しく、特に国立大学は国の財政赤字が莫大になっていますので予算面の締め付けが非常に厳しいのです。国からの運営交付金にかなり依存しているのですが、独立法人化されてから毎年1%ずつ減らされて、もう1割以上減少しています。一方で世の中の大学に対する要請のレベルが上がって来ており、教育面ではグローバル化に対応せよとか、研究面では最先端を目指せとか、社会貢献しろとか、そういう期待に応えていかなければいけない。いま大学運営は非常に難しい時代になっていると実感しています。大学としての方向性を示していかなければならないし、特にどういうビジョンで進めて行くのかということが強く求められてきていると思います。

上野 私も全く同じです。社会がいろいろな困難を抱えるようになってきたので、大学に対する期待とか社会的要請が強くなってきていると痛感します。私の大学も公立ですので、タックスペイヤーに対する説明責任がありますから、常に高い研究力と高い教育水準を求められると意識しています。高い教育水準とは、学生に本当の考える力を身につけさせることを意味します。真の能動的な学びを保証する、ということを大学に定着させなければいけない。その意味では今大学の責任は非常に重いのです。だから学長としても大学の構成員に常にそれを浸透させることが非常に重いタスクだと思っています。

学生がどれだけ能力を身につけたかという事をちゃんと質保障しなければいけないし、大学が常に自己改革をして高い研究発信力と教育の力を常に世の中に示していくことが社会に対する責任だと思っています。

-----学長就任時に国から、或いは都からこんなことをしてくれとか言われたことはありますか。

私が5年前に校長に就任した時には、何とか進学実績を上げろと言われました。それが都からの要請でしたし、そのためにいろいろ努力をしてきたつもりですが。

蓼沼 特にそういった特定の要請は無かったですが、一般的な要請として、もっと各大学の特色を生かして研究・教育を強化していくよう常に求められますし、文部科学省の方針として示されますね。一橋大学は自分の出た大学でもあり大学の特色も良く理解しているつもりですので、それをしっかり伸ばしていこうと思っています。

上野 私の場合も何もなかったです。大学のタスクというのは極めてはっきりしていますから。高い水準の教育と研究をうまく循環させて高い評価を得ること、それからグローバル化と自己改革。大学が自己改革していかなければいけないという方向性はどの大学も

共通なので、その意味ではバランスよく大学を動かしていくことが私の役割とと思っています。とりわけ都立の大学なので、東京都の政策に対するシンクタンク的な役割を果たすというのが私どもの大学の大きな特徴の一つかも知れません。東京都は財政的に健全ですし、都の信頼を勝ち取るためにも都政に協力し都との連携を大切にするという、これがうちの大学の特色です。

蓼沼 一橋の場合は社会科学の大学なので、もう一つの課題を抱えています。理工系の大学に比べると成果が見えにくいのです。理工系の場合は、例えばロボットを作りましたとか、宇宙のこういうことが発見できましたとか、研究成果が判り易く、また産業の利益に結びつき易いという面があります。

社会科学の場合は、政策提言や制度改革など様々な面で社会に貢献しているのですが、その成果が目に見えにくい。でも社会科学は社会に無くてはならないものです。もし無かったならば、いろいろな政策や社会制度の設計が上手く機能しなくなってしまうと思います。もう一つの使命は、人間行動から社会現象まで広く俯瞰できるような力を学生に身につけさせることです。即ち実際の政策形成・制度改革に貢献しているという面と、社会の見方を養うという、広い意味で教養を身につけさせるという面と、その二つの面で社会に貢献していることを説明していかなければいけないし、大学全体、特に学長がその役割を担っているのだと思っています。

上野 その部分もかなり同感です。うちの大学は総合大学なのですが、社会の要請はどうしても理工系に傾きがちです。社会全体の成り立ちをしっかりと支えるという意味では、やはり人文社会科学系の研究はとても大事なのですが、蓼沼先生も言われたように論文の数や目に見える効果がなかなか見えにくいので、そこをしっかりと学長としてはサポートしていかなければいけないと思っています。

9 海外留学で得た外国人とのネットワーク

-----今までの人生の中でご自身にとってキーポイントとなったと思われること、出来事は何でしょうか。

蓼沼 もちろん最大のキーポイントは結婚してパートナーと子供を持ったことですね。その次のキーポイントは、アメリカに5年間留学したことです。勉強・研究の面でも大変だったのですが、苦学生で5年間一人で自炊生活をして、随分鍛えられました。日本での生活と違い、アメリカで自炊というのは特に困難なことでした。まず材料を調達するのが難しいし、車が無ければスーパーに行くこと自体も難しい。限られた予算では、外食はハンバー

ガーくらいしか食べるものが無い。とにかく逃げ道が全くないというのがきつかったです。何とか生活できるくらいの奨学金をもらってのやりくりなので、お金も限られていました。一方で勉強がとて忙しくて時間が限られてくるので、時間を効率的に使いながら食べて寝てという生活、そういうマネジメント力をその時鍛えられたという気がします。

-----大学生活や留学生活で師匠の先生から大きな影響を受けたというのがありますか。

蓼沼 常に大きな影響を受けました。キーポイントというならば当然どの段階でもキーポイントです。学部のゼミの先生もちろんそうですし、アメリカの大学院の指導教員の先生も世界的に高名な先生なのですけれども、大変丁寧な指導をして頂きました。日本人は義理人情に特に厚いとかよく言われますが、心の触れ合いというのはどこの国に行っても変わらないし、人間関係はとても大事です。留学中の私の指導教員も非常に良く私の面倒を見てくれました。そういう人間同士のネットワークはアメリカでもどこの国でも大切ですね。また、自分の研究の面では、アメリカ留学の時代にどんどん基礎理論のほうに向かっていきましたので、アカデミックな面でも強い影響を受けました。



上野 私は学生結婚だったんです（笑）。若くして結婚して、その頃、家内には経済的には苦労をかけました。それ以来今でも連れ添っていますから、それが第一のターニングポイントだったかなと思います。それと二十数年前に助教授の時にイギリスに留学するチャンスがあり、思い切って家族全員一緒にロンドンに連れて行ったのです。子供達も現地の普通の学校に入れました。その時お会いしたロンドン大学の先生とは今でも交流があります。私の弟子を二人ほどその先生の下に留学させたりしました。その方を私は二番目の師匠と思っています。それがもう一つのターニングポイントだったと思います。

10 大学入試改革についての思い

----- 大学入試改革も今盛んに言われてますね。どのように変えていこうとしているのか、大学のほうでどのように進んでいるのかお聞きしたいのですが。

蓼沼 具体的にはまだ何も決まっていなくて、これから検討を始めるという段階ですね。良く言われるのは多様性のある入試制度にすべきということ。一方で大学での勉強について行くためにはやはり知識は大事ですし、文系理系併せて高校で基礎知識をしっかり身につけ

てほしいと思います。文系理系どちらか一方ではなく、今は両方の知識が必要になっている時代です。人類が積み上げてきた知識体系というのはしっかり身につけてほしいですし、大学側としてはその確認をしないといけない。その上で何かとても良いところがある、例えば数学オリンピックで優勝するほど数学が出来るとか、英語が飛び抜けて出来るとか、いろいろな異才を持っているとか、そういう生徒が合格し易いような、もう少し門戸を広げる仕組みを持った入試制度にするよう検討を始めているところです。

-----やはり知識は大切だと。大学入試改革と言われているけれど、大学入試で求められているのはやはり知識。知識の量ですか？

蓼沼 知識の量というよりも、如何にそれを理解しているか、理解して使えるかということが重要ですね。

-----入試問題を作成するほうも大変ですね。知識を活用できるかということをお問わなくてはいけない訳ですから。私たちが思っている大学入試改革というのは、知識だけではなくていろいろな方法でその大学に入学できる資質を持った生徒を見出そうと、そういうシステムを作り出そうとしているのではないかなと思っているのですが。首都大学東京のほうはどうなのでしょう。

上野 高校時代に基本 5 教科（国社数理英）をしっかり学べていることが大前提です。理系にしる文系にしる、その基本 5 教科がバランス良くしっかり学べていることが原則。その上で如何に能動的な学びの姿勢があるとか、しっかりした自己開発の能力があるとか、そういうところをちゃんと見ましようというのがこれからの入試改革だと思います。だから工学部あるいは理学部に進むから社会とか歴史とか地理が学べていないというのは駄目で、機械工学分野に進むにしても生物とか化学とかそういったベーシックなサイエンスが高校時代にちゃんと学べていることが原則です。研究の最先端もボーダーレスになっていますので、例えば機械工学をやっている人もロボット工学だとかお年寄りの心理だとか、或いは生体の原理だとか、そういうこともちゃんと解っていなければいけない。とにかく高校の時に全てのフィールドでしっかり学べていて、しかも部活に限らず、アクティブにいろんなことに活躍したとか、例えば一生懸命いろんな本を読んだり、スポーツに限らず音楽に夢中になったり することでも良いのだけれど、要するにベーシックなことはしっかり学べていて その上で人間としてしっかり発信力がある、そういうところを大学としてちゃんと見ましようということだと思います。当大学



では理系の学部では、英語の試験は外部試験に切り替えようという案も出ています。ですから英語の4技能を高校時代にしっかり習得しておく必要があると思います。大学の入試が変わらないと高校の教育も変わらないという意見も多いですし。

-----大学でもさまざま変革を求められているということですが、都立高校も同様に変革を求められています。うちの学校でも思考力・判断力を強化するという「思考力向上プロジェクト」を推進中です。それと先生方の授業力を上げないことには立川高校の維持発展はできないだろうという認識から、「授業力向上研修チーム」をつくって若い先生方を中心に勉強してもらっています。即ち、教え込みから脱却して自主的・主体的に活動できる生徒を育成していこうという活動を今始めたところです。

11 高校時代は全教科の基礎知識を習得せよ

-----最後に現役立高生へのメッセージをお願いします。

蓼沼 先ず好きなことに打ち込んでほしい。好きなことがどうやったら見つかるかということになると、確たることは何も言えないですが、学校の雰囲気も重要で、自由で自律的で、お互いを尊重し合うという空気の中で好きなことをとことんやれたら、自分の得意分野や打ち込める分野が自然と見つかってくると思います。

そして高校で学ぶ教科は将来、すべて必要になる知識なので、受験勉強に限るのではなくて全教科しっかりと身につけて欲しい。そうしないと後で選択肢が狭まってしまうと思います。例えば文系の勉強ばかりやっていると、後で大学に入ってから、もしくは社会に出てから理系の知識が必要になった時に、どこから取り掛かって良いか全く判らない。全部知っている必要は無いのですが、どこから取り掛かればその必要な知識が得られるかという、とっかかりが判るようになっていることが重要です。そういう観点では、やはり高校時代に全教科の基礎知識を習得しておくということがこれからの時代ではとても大切だと思います。

上野 あとは少なくとも高校までは自分は数学が苦手だ、国語が苦手だとか自分で線を引かないこと。また、蓼沼先生と同様に、私も自分が打ち込める分野に出会えたということが幸せだったし、そのことが大きな力にもなる。そういう道を早く見つけて欲しいなと思います。自分がどういう分野に向いているのか、将来どんなところで活躍したいのか、そういうところをしっかり見極めて大学選びをしてほしいと思います。

-----立川高校のカリキュラムはとにかく全教科全部履修です。学校によっては文系の生徒は3年生では数学を履修しないという高校もありますが、うちは文系の3年生にも数学必修にしてい

ます。でも非常に風当たりも強いです。文系私立大学を受験するのに何故数学が必要なのかとか。お二人の学長のお話をお聞きして、立川高校はその方針で進んで行って良いのだと再認識致しました。

本日は立高卒の有名大学の学長お二人にお越し頂いて、いろいろと貴重なお話を伺わせて頂きました。本日はどうも有難うございました。



東京都立立川高校同窓会 紫芳会会報『紫芳』54号（平成27年12月8日発行）より転載